

形式的ベイズ解の許容性について

大阪市大 橋本 勲

序論 これは [1] を厳密にしたものである。どの点がそうになっているかという。 i) prior measure が improper prior measure に近づく意味をはっきりさせた。 ii) [1] の §3 以下の仮定と剰余項の意味をはっきりさせた。また [1] には次のような難点があった。 i) Lebesgue measure に対する形式的ベイズ解の許容性 <sup>は</sup> §4 で述べる普通に考えられる例では [1] のある条件が成立せず示されない。それがどの点にあり、どう改良したかは §4 の終りで述べる。 ii) [1] の次の定理はまちがいである。任意のコンパクトな閉包をもつ開集合  $S$  と任意の  $\varepsilon > 0$  に対して、 $\delta > 0$  と prior probability measure  $\xi$  が存在し、1°  $\xi$  が Lebesgue measure  $l$  に関して絶対連続。2°  $\xi(S) \geq \delta$ 。3°  $\int \rho(\omega, d^0) d\xi \leq \inf_{d \in D} \int \rho(\omega, d) d\xi + \varepsilon$  なる条件を  $d^0$  が満足するならば、 $d^0$  は  $l$ -almost admissible である。その反例は H. Kudo に与えて与えられた。それを言うために定理を変形する。その変形は [0] p.6 (2) になる。もう少し変形して、

$$(1) \liminf_{n \rightarrow \infty} \frac{\rho(\xi^n, d^0) - \inf_{d \in D} \rho(\xi^n, d)}{\xi^n(S)} = 0$$

そこで、 $\Omega = [0, 1]$ ,  $D = \{d_0, d_1\}$  とし  $\rho$  を次のように定義する。  $\Omega_1$  を  $\Omega$  の中央部、中  $\frac{1}{3}$  の閉区間とし、 $\Omega_2$  を残った二つの閉区間の中央部の中  $\frac{1}{2}$  の

/

南辺周とし、次に残った四つの内辺周の中央部の中点の南辺周とする。この操作を限りなく繰り返す。  $E = \Omega_1 + \Omega_2 + \dots$ ,  $E_n = \Omega_1 + \Omega_2 + \dots + \Omega_n$  とする。  $P(\omega, d_0) \equiv 1$ ,  $P(\omega, d_1) = \chi_E(\omega) = \begin{cases} 1 & \text{if } \omega \in E \\ 0 & \text{otherwise} \end{cases}$  とする。明らかにすべての  $\omega$  に対して,  $P(\omega, d_1) \leq P(\omega, d_0)$  か  $\Omega - E$  上で  $P(\omega, d_1) < P(\omega, d_0)$ .

$\mathcal{L}(\Omega - E) = \frac{1}{2}$  である。すなわち  $d_0$  は  $\mathcal{L}$ -almost admissible でない。したがって,  $\xi^{(n)}(F) = c_n \int_F \chi_{E_n}(\omega) d\omega$  ( $c_n^{-1} = \int_{\Omega} \chi_{E_n}(\omega) d\omega$ ) とすれば,

$$\begin{aligned} P(\xi^{(n)}, d_0) - \inf_d P(\xi^{(n)}, d) &= P(\xi^{(n)}, d_0) - P(\xi^{(n)}, d_1) \\ &= c_n \int_{\Omega} \chi_{E_n}(\omega) d\omega - c_n \int_{\Omega} \chi_{E_n \cap E}(\omega) d\omega = 0. \end{aligned}$$

任意のコンパクトな閉包をもつ開集合  $S$  とすれば,  $E \cap S \neq \emptyset$ . 故に,

$$\xi^{(n)}(S) = c_n \int_S \chi_{E_n}(\omega) d\omega = c_n \int_S \chi_{E_n \cap S}(\omega) d\omega \rightarrow 2 \int_S \chi_{E \cap S}(\omega) d\omega \neq 0.$$

すなわち (1) の条件が満たされることになり,  $d_0$  が  $\mathcal{L}$ -almost admissible であることになる。ところが  $d_0$  はそうではなかった。

§1 では [0] と少し違った記号を用いるので記号を説明する。§2 では決定関数が許容的であるための 2 つの十分条件を上げる。その他のこの種の定理は [0] を参照。§3 では [1] に従って距離  $m$ , 分離  $\rho$  を定義し, §2 の定理を詳細していく。そして §4 では例を上げる。

§1.  $(\mathcal{X}, \mathcal{B}, \lambda, \Omega, \mathcal{C}, \rho, D, L)$  を統計的決定問題とよぶ。ただし,  $\mathcal{X}$  はある集合;  $\mathcal{B}$  は  $\mathcal{X}$  の部分集合からなる  $\sigma$  体,  $\lambda$  は  $\mathcal{X}$  上の  $\sigma$  有限測度,  $\Omega$  は  $\mathcal{R}^k$ ,  $\mathcal{C}$  はボレル集合からなる  $\sigma$  体,  $\rho$  は  $\mathcal{X}$  上の  $\lambda$  に関する分布密度関数,  $D$  は  $\mathcal{X}$  から  $A$  (ある集合) への対応全体とし,  $L$  は  $\Omega \times A$  上で定義された非負関数である。危険関数は  $P(\omega, d) = E_{\omega} L(\omega, d(x)) = \int_{\mathcal{X}} L(\omega, d(x)) p(x|\omega) d\lambda$  とする。以後, 決定問題を単に  $(\Omega, D, P)$  とかく。

以上に  $\int_{\Omega} p(x|\omega) d\gamma < \infty$  a.e.  $\lambda$  なる非負測度  $\gamma$  を与える.  $\gamma$  を prior measure といふ.  $\Xi$  を有限 prior measures の全体とする. また  $\gamma(\Omega) = \infty$  のとき  $\gamma$  を improper (or unbounded) prior measure といふ.  $\Pi$  を  $\sigma$  有限 improper prior measures の全体とする. 以後  $\gamma$  と書けば  $\Xi$  の元であり,  $\gamma$  と書けば  $\Pi$  の元である. 平均危険関数 は  $\rho(\gamma, d) = \int_{\Omega} \rho(\omega, d) d\gamma$  とかく. 事後確率分布 を  $\zeta_{\gamma}(\omega) = \frac{p(x|\omega) \gamma(\omega)}{\int_{\Omega} p(x|\omega) d\gamma}$  とかく.

形式的ベイズ解の定義は [0] p.14 を参照.

§2. [0] p.5 定理 3.2 の必要性の証明は次の定理の証明と同様にして出来る. また次の定理は定理 2.2 を証明するのにも用いる.

定理 2.1  $\mu$  を以上の  $\sigma$  有限測度とし,  $\mathcal{K} = \{\Omega_0 < \Omega : \mu(\Omega_0) > 0\}$  とする.

そのとき,  $d^0$  が, 任意の  $\Omega_0 \in \mathcal{K}$  に対して,  $\{\xi^{(n)}\}$  ( $n=1, 2, \dots$ ) が存在し,

$$(2) \liminf_{n \rightarrow \infty} \xi^{(n)}(\Omega_0) > 0$$

$$(3) \liminf_{n \rightarrow \infty} [\rho(\xi^{(n)}, d^0) - \inf_{d \in D} \rho(\xi^{(n)}, d)] = 0$$

なる条件を満足するならば,  $d^0$  は  $\mu$ -almost admissible である.

証明  $d^0$  が  $\mu$ -almost admissible でないとする. するとある  $d^* \in D$  が存在してすべての  $\omega \in \Omega$  に対して  $\rho(\omega, d^*) \leq \rho(\omega, d^0)$  かつ  $\Omega'_0 \in \mathcal{K}$  が存在して,  $\Omega'_0$  上で真の不等号が成り立つ. 故に適当に十分小さい  $\varepsilon > 0$  をとって,  $\Omega_\varepsilon = \{\omega : \rho(\omega, d^0) - \rho(\omega, d^*) > \varepsilon\} \in \mathcal{K}$  ならしめよう. この  $\Omega_\varepsilon$  に対して (2), (3) をみたす  $\{\xi^{(n)}\}$  が存在する. (2) から十分大きい  $n$  に対して,  $\xi^{(n)}(\Omega_\varepsilon) \geq \delta > 0$ . ところが,  $\rho(\xi^{(n)}, d^0) - \inf_{d \in D} \rho(\xi^{(n)}, d) \geq \rho(\xi^{(n)}, d^0) - \rho(\xi^{(n)}, d^*) > \varepsilon \delta > 0$ . したがって (3) に矛盾する. (終)

次にここを用いる主要定理を述べよう.

定理 2.2  $l$  を  $\Omega$  上の Lebesgue 測度とし,  $\Lambda = \{S \subset \Omega : \text{open sets with compact closure}\}$  とする. そのとき  $d^0$  が, 任意の  $S \in \Lambda$  に対して,  $\{\xi^{(n)}\}$  ( $n=1, 2, \dots$ ) が存在し

(4) すべての  $n$  に対して  $\xi^{(n)}$  は  $l$  に関して絶対連続である. ( $\xi^{(n)} \ll l$  とかく.)

(5) その Radon-Nikodym derivative  $\frac{d\xi^{(n)}}{dl} \in f^{(n)}$  とする.

(6) すべての  $n$  に対して  $|g^{(n)}(\omega)| \leq Q(\omega)$  ( $\omega \in S$ ) となる, 可積分関数  $Q$  が存在する.

(7)  $\lim_{n \rightarrow \infty} g^{(n)}(\omega) = c$  (定数) for  $\omega \in S$  ( $c > 0$ )

(8)  $\lim_{n \rightarrow \infty} \inf [P(\xi^{(n)}, d^0) - \inf P(\xi^{(n)}, d)] = 0$

を満足していけば,  $d^0$  は  $l$ -almost admissible である.

証明  $\Omega = \mathbb{R}^k$  であった.  $\Omega = \mathbb{R}^1$  のときを示せば十分である. 定理 2.2 の仮定から定理 2.1 の仮定が成ることを示す. 密度定理から任意の  $\Omega_0 \in \mathcal{H}$ , 任意の  $\omega \in \Omega_0$  に対して,  $I_\epsilon = (\omega - \epsilon, \omega + \epsilon) \in \Lambda$  が存在し,  $l(\Omega_0 \cap I_\epsilon) > 0$ . この  $I_\epsilon$  に対して (4) ~ (7) をみたす  $\{\xi^{(n)}\}$  が存在する. この  $\{\xi^{(n)}\}$  を定理 2.1 の  $\{\xi^{(n)}\}$  と考えれば, Fatou の Lemma を用いて,

$$\begin{aligned} \liminf_{n \rightarrow \infty} \xi^{(n)}(\Omega_0) &\geq \liminf_{n \rightarrow \infty} \xi^{(n)}(\Omega_0 \cap I_\epsilon) = \liminf_{n \rightarrow \infty} \int_{\Omega_0 \cap I_\epsilon} g^{(n)}(\omega) dl \\ &\geq c \cdot l(\Omega_0 \cap I_\epsilon) > 0 \end{aligned}$$

故に (2) が成る. (3) は (7) と同じである. (終)

例 3.  $(\Omega, \mathcal{D}, P)$  と  $\xi \in \mathcal{H}$  とが与えらぬとするとする. 従って  $\xi$  に対する形式的ベイズ解  $d^0$  は決まる. 以後この  $d^0$  が許容的 (殆んど) であるかどうかを判定する見易い定理を定理 2.2 に基づいて出すのが目的である.

そのために先ず,  $\xi$  に 距離  $m$  を次のように定義する (by Matsuzita).

(8)  $m(\xi^{(1)}, \xi^{(2)}) = \int_{\Omega} \left[ \sqrt{\frac{d\xi^{(1)}}{d\xi}} - \sqrt{\frac{d\xi^{(2)}}{d\xi}} \right]^2 d\xi$  for  $\xi^{(1)}, \xi^{(2)} \in \Xi$   
 in  $\mathcal{L}$ ,  $\frac{d\xi^{(i)}}{d\xi}$  ( $i=1,2$ ) is Radon-Nikodym derivative.

次に、 $\Xi$  と  $H$  との分離  $m^*$  と次のように定義する。  $\xi \in \Xi$ ,  $\eta \in H$  に対して、

$$(9) m^*(\xi, \eta) = E_{P_\xi} m(\xi_x, \eta_x)$$

in  $\mathcal{L}$ ,  $P_\xi$  is  $\int_{\Omega} p(\alpha|\omega) d\xi$  with,  $E_{P_\xi}$  is  $P_\xi$  の平均を表す。  $\xi_x, \eta_x$  が有限測度 (実は確率測度) であるから、 $m(\xi_x, \eta_x)$  が定義できることに注意

定理 2.2 を用いた易い形にするというのは与えられている条件 (7) を  $m^*$  で表現すること (才 I 段階),  $m^*$  を評価すること (才 II 段階) である。

I.  $\{\xi^{(n)}\}$  ( $n=1,2,\dots$ ) に対応するベイズ解の列を  $\{d_n^*\}$  とする。  $n \geq 1$  を固定して、 $L(\omega, d^0(x))$  と  $L'(\omega, d^0(x))$  を  $d_n^*$  のまわりでテーラー展開する。

$$(10) L(\omega, d^0(x)) = L(\omega, d_n^*(x)) + (d^0(x) - d_n^*(x)) L'(\omega, d_n^*(x)) + \frac{1}{2} (d^0(x) - d_n^*(x))^2 L''(\omega, d_n^*(x)) + o(\omega, |d^0(x) - d_n^*(x)|^3)$$

$$(11) L'(\omega, d^0(x)) = L'(\omega, d_n^*(x)) + (d^0(x) - d_n^*(x)) L''(\omega, d_n^*(x)) + o(\omega, |d^0(x) - d_n^*(x)|)$$

in  $\mathcal{L}$ ,  $L', L''$  は与えられた  $L(\omega, a)$  の  $a$  に関する 1, 2 回微分を表す。

$$\varepsilon_1 = o(\omega, |d^0(x) - d_n^*(x)|), \quad \varepsilon_2 = o(\omega, |d^0(x) - d_n^*(x)|^2) \text{ と可}$$

補題 3.1

(12) 各  $\omega \in \Omega$  に対して、 $L(\omega, a)$  は  $a$  に関して 2 階連続的微分可能。

$$(13) \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\Xi} P_{\xi^{(n)}}(x) \int_{\Omega} \varepsilon_2 d\xi_x^{(n)} d\lambda = 0$$

$$(14) \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\Xi} P_{\xi^{(n)}}(x) \frac{\int_{\Omega} \varepsilon_1^2 d\xi_x^{(n)}}{\int_{\Omega} L''(\omega, d_n^*(x)) d\xi_x^{(n)}} d\lambda = 0$$

$$(15) \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\Xi} P_{\xi^{(n)}}(x) \frac{[\int_{\Omega} L'(\omega, d^0(x)) d\xi_x^{(n)}] [\int_{\Omega} \varepsilon_1 d\xi_x^{(n)}]}{\int_{\Omega} L''(\omega, d_n^*(x)) d\xi_x^{(n)}} d\lambda = 0$$

$$M^{(n)}(x) = \frac{\int_{\Omega} L''(\omega, d^{(n)}(\omega)) d(\xi_x^{(n)} + \eta_x)}{\int_{\Omega} L''(\omega, d_n^*(\omega)) d\xi_x^{(n)}}, \quad N^{(n)}(x) = P_{\xi^{(n)}}(x) \cdot \mathcal{N}(\xi_x^{(n)}, \eta_x) \text{ とおく.}$$

(16)  $\lim_{n \rightarrow \infty} M^{(n)}(x) = K$  ( $x$  と無関係)  $< \infty$  a.e.  $\lambda$

(17)  $\lim_{n \rightarrow \infty} N^{(n)}(x) = J(x) < \infty$  a.e.  $\lambda$ .

(18) 各  $n$  に對して  $|M^{(n)}(x) \cdot N^{(n)}(x)| \leq F(x)$  とする, 可積分関数  $F$  が存在する.

このとき,

(19)  $\liminf_{n \rightarrow \infty} [P(\xi^{(n)}, d^0) - \inf_{d \in D} P(\xi^{(n)}, d)] \leq K \cdot \lim_{n \rightarrow \infty} M^*(\xi^{(n)}, \eta)$

(損失関数  $L$  が quadratic ならば) (12) ~ (15) は明らかに成立する.)

証明  $P(\xi^{(n)}, d) - \inf_{d \in D} P(\xi^{(n)}, d) = P(\xi^{(n)}, d) - P(\xi^{(n)}, d_n^*)$

$$= \int_{\mathcal{E}} P_{\xi^{(n)}}(x) \left\{ \int_{\Omega} [L(\omega, d^{(n)}(\omega)) - L(\omega, d_n^*(\omega))] d\xi_x^{(n)} \right\} d\lambda(x)$$

(10) から,  $L(\omega, d^{(n)}(\omega)) - L(\omega, d_n^*(\omega)) = (d^{(n)}(\omega) - d_n^*(\omega)) L'(\omega, d_n^*(\omega)) + \frac{1}{2} (d^{(n)}(\omega) - d_n^*(\omega))^2 L''(\omega, d_n^*(\omega)) + \varepsilon_2$

(仮定 (12) により) (10), (11) 式は成り立つ).  $d_n^*$  が  $\xi^{(n)}$  のベイズ解であるから,

$\int_{\Omega} L'(\omega, d_n^*(\omega)) d\xi_x^{(n)} = 0$ . この事実を用いると,

$$\int_{\Omega} [L(\omega, d^{(n)}(\omega)) - L(\omega, d_n^*(\omega))] d\xi_x^{(n)} = \frac{1}{2} (d^{(n)}(x) - d_n^*(x))^2 \int_{\Omega} L''(\omega, d_n^*(\omega)) d\xi_x^{(n)} + \int_{\Omega} \varepsilon_2 d\xi_x^{(n)} \dots \dots \dots \textcircled{1}$$

(11) から,  $(d^{(n)}(x) - d_n^*(x)) \cdot \int_{\Omega} L''(\omega, d_n^*(\omega)) d\xi_x^{(n)} = \int_{\Omega} L'(\omega, d^{(n)}(\omega)) d\xi_x^{(n)} - \int_{\Omega} \varepsilon_1 d\xi_x^{(n)}$

$$d^{(n)}(x) - d_n^*(x) = \frac{\int_{\Omega} L'(\omega, d^{(n)}(\omega)) d\xi_x^{(n)} - \int_{\Omega} \varepsilon_1 d\xi_x^{(n)}}{\int_{\Omega} L''(\omega, d_n^*(\omega)) d\xi_x^{(n)}} \dots \dots \dots \textcircled{2}$$

$\int_{\Omega} L'(\omega, d_n^*(\omega)) d\xi_x^{(n)} = 0$  のとき,  $P(\xi^{(n)}, d^0) - \inf_{d \in D} P(\xi^{(n)}, d) \equiv 0$  とする (17) は trivial になる. 従って  $\int_{\Omega} L'(\omega, d_n^*(\omega)) d\xi_x^{(n)} \neq 0$  のときだけを考える.

②  $\varepsilon \in \mathbb{D}$  に代入して

$$\int_{\Omega} [L(\omega, d^0(x)) - L(\omega, d_n^*(x))] d\mathbb{T}_x^{(n)} = \frac{1}{2} \frac{[\int_{\Omega} L'(\omega, d^0(x)) d\mathbb{T}_x^{(n)} - \int_{\Omega} \varepsilon_1 d\mathbb{T}_x^{(n)}]^2}{\int_{\Omega} L''(\omega, d_n^*(x)) d\mathbb{T}_x^{(n)}} + \int_{\Omega} \varepsilon_2 d\mathbb{T}_x^{(n)}$$

故に,  $\liminf_{n \rightarrow \infty} [P(\mathbb{T}_x^{(n)}, d^0) - \inf_{d^*} P(\mathbb{T}_x^{(n)}, d^*)]$

$$= \liminf_{n \rightarrow \infty} \int_{\Omega} P_{\mathbb{T}_x^{(n)}}(x) \cdot \left\{ \frac{1}{2} \frac{[\int_{\Omega} L'(\omega, d^0(x)) d\mathbb{T}_x^{(n)} - \int_{\Omega} \varepsilon_1 d\mathbb{T}_x^{(n)}]^2}{\int_{\Omega} L''(\omega, d_n^*(x)) d\mathbb{T}_x^{(n)}} + \int_{\Omega} \varepsilon_2 d\mathbb{T}_x^{(n)} \right\} d\lambda$$

(13) を用いると

$$= \liminf_{n \rightarrow \infty} \int_{\Omega} P_{\mathbb{T}_x^{(n)}}(x) \frac{[\int_{\Omega} L'(\omega, d^0(x)) d\mathbb{T}_x^{(n)}]^2 - 2[\int_{\Omega} L'(\omega, d^0(x)) d\mathbb{T}_x^{(n)}][\int_{\Omega} \varepsilon_1 d\mathbb{T}_x^{(n)}] + [\int_{\Omega} \varepsilon_1 d\mathbb{T}_x^{(n)}]^2}{\int_{\Omega} L''(\omega, d_n^*(x)) d\mathbb{T}_x^{(n)}} d\lambda$$

(14), (15) を用いると

$$= \frac{1}{2} \liminf_{n \rightarrow \infty} \int_{\Omega} P_{\mathbb{T}_x^{(n)}}(x) \frac{[\int_{\Omega} L'(\omega, d^0(x)) d\mathbb{T}_x^{(n)}]^2}{\int_{\Omega} L''(\omega, d_n^*(x)) d\mathbb{T}_x^{(n)}} \quad \text{--- ③}$$

$d^0$  が  $\mathbb{T}$  に対する形式的な 1 次解であるから,  $\int_{\Omega} L'(\omega, d^0(x)) d\eta_x = 0$ . この事実

を用いて ③ の分子を変形すると

$$\begin{aligned} [\int_{\Omega} L'(\omega, d^0(x)) d\mathbb{T}_x^{(n)}]^2 &= [\int_{\Omega} L'(\omega, d^0(x)) (d\mathbb{T}_x^{(n)} - d\eta_x)]^2 \\ &= [\int_{\Omega} L'(\omega, d^0(x)) (\sqrt{d\mathbb{T}_x^{(n)}} + \sqrt{d\eta_x})(\sqrt{d\mathbb{T}_x^{(n)}} - \sqrt{d\eta_x})]^2 \end{aligned}$$

Schwarz の不等式より

$$\leq \int_{\Omega} L'^2(\omega, d^0(x)) (\sqrt{d\mathbb{T}_x^{(n)}} + \sqrt{d\eta_x})^2 \cdot \int_{\Omega} (\sqrt{d\mathbb{T}_x^{(n)}} - \sqrt{d\eta_x})^2$$

$$\frac{d\mathbb{T}_x^{(n)} + d\eta_x}{2} \geq \sqrt{d\mathbb{T}_x^{(n)} d\eta_x} \quad \text{を用いると}$$

$$\leq 2 \int_{\Omega} L'^2(\omega, d^0(x)) d(\mathbb{T}_x^{(n)} + \eta_x) \cdot m(\mathbb{T}_x^{(n)}, \eta_x)$$

故に ③ 式は  $\liminf_{n \rightarrow \infty} [P(\mathbb{T}_x^{(n)}, d^0) - \inf_{d^*} P(\mathbb{T}_x^{(n)}, d^*)]$

$$\leq \liminf_{n \rightarrow \infty} \int_{\Omega} P_{\mathbb{T}_x^{(n)}}(x) \frac{\int_{\Omega} L'^2(\omega, d^0(x)) d(\mathbb{T}_x^{(n)} + \eta_x) \cdot m(\mathbb{T}_x^{(n)}, \eta_x)}{\int_{\Omega} L''(\omega, d_n^*(x)) d\mathbb{T}_x^{(n)}} d\lambda$$

$$= \liminf_{n \rightarrow \infty} \int_{\Omega} M^{(n)}(x) \cdot N^{(n)}(x) d\lambda$$

(16), (17), (18) を用いれば

$$\begin{aligned} &= K \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\mathcal{F}_n} m(\xi_n, \gamma_n) \cdot P_{\xi_n}(x) d\lambda \\ &= K \lim_{n \rightarrow \infty} m^*(\xi_n, \gamma) \quad (\text{終}) \end{aligned}$$

定理 2.2 と補題 3.1 を用いて述べると,

定理 3.1 仮定 (12) の下で  $d^0$  が, 任意の  $S \in \Lambda$  に対して,  $\{\xi^{(n)}\} (n=1, 2, \dots)$  が存在して, (4) ~ (6), (13) ~ (18) を満たす

$$(20) \quad \lim_{n \rightarrow \infty} m^*(\xi^{(n)}, \gamma) = 0$$

を満足するならば,  $d^0$  はルベック測度に準して殆んど許容的である.

II.  $m^*(\xi^{(n)}, \gamma)$  を評価する. 各  $n$  に対して,  $\xi^{(n)} \ll \gamma$  で, その Radon-Nikodym derivative  $\frac{d\xi^{(n)}}{d\gamma}$  を  $\gamma^{(n)}$  とする. また,

$$\hat{\omega}(x) = \frac{\int_{\Omega} \omega p(x|\omega) d\gamma}{\int_{\Omega} p(x|\omega) d\gamma}$$

とする.  $n \in \mathbb{N}$  を固定して,  $\gamma^{(n)}(\omega)$ ,  $\sqrt{\gamma^{(n)}(\omega)}$  は  $\hat{\omega}$  のまわりで Taylor 展開する.

$$(21) \quad \gamma^{(n)}(\omega) = \gamma^{(n)}(\hat{\omega}) + (\omega^i - \hat{\omega}^i) \gamma_{i1}^{(n)}(\hat{\omega}) + \frac{1}{2} (\omega^i - \hat{\omega}^i)(\omega^j - \hat{\omega}^j) \gamma_{ij}^{(n)}(\omega^*)$$

$$(22) \quad \sqrt{\gamma^{(n)}(\omega)} = \sqrt{\gamma^{(n)}(\hat{\omega})} + (\omega^i - \hat{\omega}^i) \frac{\gamma_{i1}^{(n)}(\hat{\omega})}{2\sqrt{\gamma^{(n)}(\hat{\omega})}} + \frac{1}{2} (\omega^i - \hat{\omega}^i)(\omega^j - \hat{\omega}^j) \left\{ \frac{\gamma_{ij}^{(n)}(\omega^*)}{2\sqrt{\gamma^{(n)}(\hat{\omega})}} - \frac{\gamma_{i1}^{(n)}(\omega^*) \cdot \gamma_{j1}^{(n)}(\omega^*)}{4[\gamma^{(n)}(\hat{\omega})]^{\frac{3}{2}}} \right\}$$

$$\text{ただし, } \gamma_{i1}^{(n)} = \frac{\partial \gamma^{(n)}}{\partial \omega^i}, \quad \gamma_{ij}^{(n)} = \frac{\partial^2 \gamma^{(n)}}{\partial \omega^i \partial \omega^j}, \quad \omega = (\omega^1, \omega^2, \dots, \omega^k)$$

$$\omega^* = \alpha \omega + (1-\alpha) \hat{\omega}, \quad \omega^{**} = \beta \omega + (1-\beta) \hat{\omega}, \quad 0 < \alpha, \beta < 1 \text{ である.}$$

(21), (22) 式の右辺の第 2 項は  $i$  に依る和であり, 第 3 項は  $i, j$  に依る和であるが記号  $\Sigma$  は除いておく.

$$(23) \quad A^{(n)}(\omega, x) = \frac{1}{2} (\omega^i - \hat{\omega}^i)(\omega^j - \hat{\omega}^j) \gamma_{ij}^{(n)}(\omega^*)$$

$$(24) \quad B^{(n)}(\omega, x) = \frac{1}{2} (\omega^i - \hat{\omega}^i)(\omega^j - \hat{\omega}^j) \left\{ \frac{\gamma_{ij}^{(n)}(\omega^*)}{2\sqrt{\gamma^{(n)}(\hat{\omega})}} - \frac{\gamma_{i1}^{(n)}(\omega^*) \cdot \gamma_{j1}^{(n)}(\omega^*)}{4[\gamma^{(n)}(\hat{\omega})]^{\frac{3}{2}}} \right\}$$



$$(25) R^{(n)}(\omega, x) = \frac{1}{2}(\omega^i - \hat{\omega}^i)(\omega^j - \hat{\omega}^j) \left\{ -\frac{1}{2} \frac{r_{ij}^{(n)}(\omega) \cdot r_{ij}^{(n)}(\omega)}{r^{(n)}(\omega)} + \frac{1}{2} \frac{r_{ij}^{(n)}(\omega^{**}) \cdot r_{ij}^{(n)}(\omega^{**})}{[r^{(n)}(\omega)]^{\frac{1}{2}} [r^{(n)}(\omega^{**})]^{\frac{1}{2}}} \right. \\ \left. - \frac{r_{ij}^{(n)}(\omega^{**})}{[r^{(n)}(\omega)]^{\frac{1}{2}} [r^{(n)}(\omega^{**})]^{\frac{1}{2}}} + r_{ij}^{(n)}(\omega^{**}) \right\}$$

と置く。また,

$$(26) u_n(x) = \frac{\int_{\mathcal{X}} A^{(n)}(\omega, x) p(x|\omega) d\eta}{r^{(n)}(\omega) \cdot P_{\eta}(x)}$$

$$(27) v_n(x) = \frac{\int_{\mathcal{X}} B^{(n)}(\omega, x) p(x|\omega) d\eta}{\sqrt{r^{(n)}(\omega)} \cdot P_{\eta}(x)}$$

と置く。

補題 3.2 (28) すべて  $n$  に対して  $L \subset \mathcal{X}^{(n)} \ll \mathcal{X}$ .

(29) すべて  $n$  に対して,  $r^{(n)}(\omega)$  は  $\omega$  に関して 2 階連続的微分可能.

(30) すべて  $n$  に対して  $|R^{(n)}(\omega, x)| \leq G(\omega, x)$  となる, 可積分関数  $G$  が存在する.

$$(31) \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\mathcal{X}} r^{(n)}(\omega) P_{\eta}(x) u_n^2(x) d\lambda = 0.$$

$$(32) \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\mathcal{X}} r^{(n)}(\omega) P_{\eta}(x) v_n^2(x) d\lambda = 0.$$

$$(33) \lim_{n \rightarrow \infty} \left\{ \frac{r_{ij}^{(n)}(\omega) \cdot r_{ij}^{(n)}(\omega)}{r^{(n)}(\omega)} - \frac{r_{ij}^{(n)}(\omega^{**}) \cdot r_{ij}^{(n)}(\omega^{**})}{[r^{(n)}(\omega)]^{\frac{1}{2}} [r^{(n)}(\omega^{**})]^{\frac{1}{2}}} \right\} = 0 \quad \text{a.e. } \lambda.$$

$$(34) \lim_{n \rightarrow \infty} \left\{ \frac{r_{ij}^{(n)}(\omega^{**})}{[r^{(n)}(\omega)]^{\frac{1}{2}} [r^{(n)}(\omega^{**})]^{\frac{1}{2}}} - r_{ij}^{(n)}(\omega^{**}) \right\} = 0 \quad \text{a.e. } \lambda.$$

ゆえに,

$$(35) \lim_{n \rightarrow \infty} [m^*(\mathcal{X}^{(n)}, \mathcal{Z}) - \frac{1}{4} \int_{\mathcal{X}} \frac{1}{r^{(n)}(\omega)} \sum_{i,j} r_{ij}^{(n)}(\omega) \cdot r_{ij}^{(n)}(\omega) g^{ij}(\omega) d\eta] = 0.$$

ただし,  $g^{ij}(\omega) = E_{\omega}(\omega^i - \hat{\omega}^i)(\omega^j - \hat{\omega}^j)$  とする.

証明 (29) から (21), (22) 式が成り立つ.

$$\begin{aligned}
 m^*(z^{(n)}, \eta) &= E_{P_{\eta^{(n)}}} m(z^{(n)}, \eta_x) \\
 &= 2 \left\{ \int_{\mathbb{R}} \frac{\left[ \int_{\Omega} p(x|\omega) r^{(n)}(\omega) d\eta \right]^{\frac{1}{2}} \left[ \int_{\Omega} p(x|\omega) \sqrt{r^{(n)}(\omega)} d\eta \right]}{\left[ \int_{\Omega} p(x|\omega) d\eta \right]^{\frac{1}{2}}} d\lambda \right\} \dots \textcircled{1}
 \end{aligned}$$

$\int_{\Omega} (\omega^2 - \hat{\omega}^2) p(x|\omega) d\eta = 0$  であることに注意して、(21) より

$$\begin{aligned}
 \int_{\Omega} p(x|\omega) r^{(n)}(\omega) d\eta &= \int_{\Omega} r^{(n)}(\omega) p(x|\omega) d\eta + \int_{\Omega} A^{(n)}(\omega, x) p(x|\omega) d\eta \\
 \therefore \left[ \int_{\Omega} p(x|\omega) r^{(n)}(\omega) d\eta \right]^{\frac{1}{2}} &= \sqrt{r^{(n)}(\hat{\omega})} \cdot (P_{\eta}(x))^{\frac{1}{2}} \left( 1 + \frac{\int_{\Omega} A^{(n)}(\omega, x) p(x|\omega) d\eta}{r^{(n)}(\hat{\omega}) \cdot P_{\eta}(x)} \right)^{\frac{1}{2}} \\
 &= \sqrt{r^{(n)}(\hat{\omega})} \cdot (P_{\eta}(x))^{\frac{1}{2}} (1 + u_n(x))^{\frac{1}{2}} \dots \textcircled{2}
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 (22) \text{ より, } \int_{\Omega} p(x|\omega) \sqrt{r^{(n)}(\omega)} d\eta &= \int_{\Omega} \sqrt{r^{(n)}(\omega)} p(x|\omega) d\eta + \int_{\Omega} B^{(n)}(\omega, x) p(x|\omega) d\eta \\
 &= \sqrt{r^{(n)}(\hat{\omega})} \cdot P_{\eta}(x) \cdot (1 + v_n(x)) \dots \textcircled{3}
 \end{aligned}$$

②, ③ を ① に代入して

$$m^*(z^{(n)}, \eta) = 2 \left\{ \int_{\mathbb{R}} \frac{r^{(n)}(\hat{\omega}) \cdot P_{\eta}(x) (1 + u_n(x))^{\frac{1}{2}} (1 + v_n(x))}{\sqrt{x}} d\lambda \right\}$$

仮定 (31), (32) を用いると、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} m^*(z^{(n)}, \eta) = 2 \left\{ \int_{\mathbb{R}} \frac{r^{(n)}(\hat{\omega}) \cdot P_{\eta}(x) (1 + \frac{1}{2} u_n(x) + v_n(x))}{\sqrt{x}} d\lambda \right\}$$

再び (21) を用いると、簡単に示すと、

$$= \lim_{n \rightarrow \infty} \left\{ \int_{\mathbb{R}} \frac{r^{(n)}(\hat{\omega}) P_{\eta}(x) u_n(x)}{\sqrt{x}} d\lambda - 2 \int_{\mathbb{R}} \frac{r^{(n)}(\hat{\omega}) P_{\eta}(x) v_n(x)}{\sqrt{x}} d\lambda \right\}$$

$u_n(x), v_n(x)$  は元に戻ると、

$$= \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\mathbb{R}} \int_{\Omega} [A^{(n)}(\omega, x) - 2\sqrt{r^{(n)}(\omega)} B^{(n)}(\omega, x)] p(x|\omega) d\eta d\lambda$$

$A^{(n)}(\omega, x), B^{(n)}(\omega, x)$  は元に戻ると、

$$\begin{aligned}
 &= \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\mathbb{R}} \int_{\Omega} \frac{1}{2} (\omega^2 - \hat{\omega}^2) (\omega^2 - \hat{\omega}^2) \left\{ \frac{r^{(n)}(\omega)}{r^{(n)}(\hat{\omega})} - \frac{r^{(n)}(\omega^*)}{[r^{(n)}(\hat{\omega})]^{\frac{1}{2}} [r^{(n)}(\omega^*)]^{\frac{1}{2}}} \right. \\
 &\quad \left. + \frac{r^{(n)}(\omega^*) \cdot r^{(n)}(\omega^*)}{2[r^{(n)}(\hat{\omega})]^{\frac{1}{2}} [r^{(n)}(\omega^*)]^{\frac{1}{2}}} \right\} p(x|\omega) d\eta d\lambda
 \end{aligned}$$

$$= \frac{1}{4} \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\mathbb{R}} \int_{\Omega} (\omega^i - \hat{\omega}^i) (\omega^j - \hat{\omega}^j) \frac{r_i^{(n)}(\omega) \cdot r_j^{(n)}(\omega)}{r^{(n)}(\omega)} p(x|\omega) d\eta d\lambda$$

$$+ \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\mathbb{R}} \int_{\Omega} R(\omega, x) p(x|\omega) d\eta d\lambda$$

仮定 (30), (33), (34) から

$$= \frac{1}{4} \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\mathbb{R}} \int_{\Omega} (\omega^i - \hat{\omega}^i) (\omega^j - \hat{\omega}^j) \frac{r_i^{(n)}(\omega) \cdot r_j^{(n)}(\omega)}{r^{(n)}(\omega)} p(x|\omega) d\eta d\lambda$$

$$= \frac{1}{4} \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\Omega} \frac{r_i^{(n)}(\omega) \cdot r_j^{(n)}(\omega)}{r^{(n)}(\omega)} g^{ij}(\omega) d\eta \quad (\text{終})$$

補題 3.2 と定理 3.1 から、最終目的の定理を得る。それは

定理 3.2 仮定 (12) の下で  $d^0$  が、任意の  $S \in \mathcal{A}$  に対して、 $\{\mathcal{F}^{(n)}\} (n=1, 2, \dots)$  が存在して、(4) ~ (6), (13) ~ (18), (28) ~ (34) を満たす

$$(36) \quad \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\Omega} \frac{1}{r^{(n)}(\omega)} \sum_{i,j} r_i^{(n)}(\omega) r_j^{(n)}(\omega) g^{ij}(\omega) d\eta = 0$$

をみたすならば、 $d^0$  は Lebesgue 測度  $\lambda$  に関して殆んど許容的である。

§4 1 つの例を与える。元は  $\mathbb{R}^1$ , およびボレル集合のなる  $\sigma$  体,  $\lambda$  はルベック測度,  $\Omega$  は  $\mathbb{R}^1$ ,  $\mathcal{B}$  はボレル集合のなる  $\sigma$  体,  $p(x|\omega) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp[-\frac{(x-\omega)^2}{2}]$ , 損失関数は  $L(\omega, a) = (a-\omega)^2$  とする問題を考える。  $d^0(\omega) = d\omega$  に対する形式的ベイアズ解がルベック測度に関して殆んど許容的であることは定理 2.2, 定理 3.1 として定理 3.2 から示されることを見る。

$\mathcal{F}$  に対する形式的ベイアズ解  $d^0$  を求める。  $d^0(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp[-\frac{(\omega-x)^2}{2}] d\omega$ . 従って,  $\int_{-\infty}^{\infty} (\omega-a)^2 \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp[-\frac{(\omega-x)^2}{2}] d\omega = 1 + (a-x)^2$ . 故に,  $d^0(a) = x$ .

先ず, 定理 2.2 から  $d^0$  が  $\lambda$ -almost admissible であることを示すことを見る。一般性を失うことなく  $S \in (-a, a)$  ( $a > 0$ ) とできる。これに対して  $\{\mathcal{F}^{(n)}\}$  として  $\{\mathcal{F}^{(\sigma^2)}\}$ ,  $d^{\mathcal{F}^{(\sigma^2)}} = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp[-\frac{\omega^2}{2\sigma^2}]$  ( $\sigma^2 \geq 1$ ), を考える。(4), (5) は自明である。(6) は  $\lim_{\sigma^2 \rightarrow \infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp[-\frac{\omega^2}{2\sigma^2}] = \frac{1}{\sqrt{2\pi}}$  for  $\omega \in (-a, a)$  であるからよい。(7) は,  $P(\mathcal{F}^{(\sigma^2)}, d^0) = \sigma$ ,  $\lim_{\sigma^2 \rightarrow \infty} P(\mathcal{F}^{(\sigma^2)}, d) = \frac{\sigma^3}{\sigma^2+1}$ . 従って

$\lim_{\sigma \rightarrow \infty} \inf_{\lambda} [P(\mathcal{F}^{(\sigma)}, \lambda) - \inf_{\lambda} P(\mathcal{F}^{(\sigma)}, \lambda)] = \lim_{\sigma \rightarrow \infty} \frac{\sigma}{\sigma^2+1} = 0$ . から示されていることがわかる. 結局, 定理 2.2 から  $\lambda$  の  $\delta$ -almost admissible が示された.

次に, 定理 3.1 から示されることをみる.  $L(\omega, a) = (a - \omega)^2$  をみるから, (12) ~ (15) は示されたことになる.

$$M^{(\sigma)}(x) = 2 \left\{ \frac{2\sigma^2+1}{\sigma^2+1} + \frac{x^2}{(\sigma^2+1)^2} \right\}$$

$$N^{(\sigma)}(x) = \frac{2\sigma}{\sqrt{2\pi(\sigma^2+1)}} \exp\left[-\frac{x^2}{2(\sigma^2+1)}\right] \cdot \left[1 - \left(\frac{\sigma^2+1}{\sigma^2}\right)^{\frac{1}{4}} \left(\frac{2\sigma^2}{2\sigma^2+1}\right)^{\frac{1}{2}} \exp\left[-\frac{x^2}{4(\sigma^2+1)(2\sigma^2+1)}\right]\right]$$

$$\lim_{\sigma \rightarrow \infty} M^{(\sigma)}(x) = 4, \quad \lim_{\sigma \rightarrow \infty} N^{(\sigma)}(x) = 0 \text{ 従って, (16), (17) は示された}$$

ことになる. (18) の  $F$  として適当に  $V, W \in \mathbb{R}$  とって  $\frac{W}{\sqrt{2\pi}V} \exp\left[-\frac{x^2}{2V^2}\right]$  を考えればよい. ここで (20) は

$$\begin{aligned} M^*(\mathcal{F}^{(\sigma)}, \gamma) &= 2\sigma \left\{1 - \left(\frac{4\sigma^2}{4\sigma^2+3}\right)^{\frac{1}{2}} \left(\frac{\sigma^2+1}{\sigma^2}\right)^{\frac{1}{4}}\right\} = 2\sigma \left\{1 - \left(1 - \frac{3}{4\sigma^2+3}\right)^{\frac{1}{2}} \left(1 + \frac{1}{\sigma^2}\right)^{\frac{1}{4}}\right\} \\ &= 2\sigma \left\{1 - \left(1 - \frac{3}{2(4\sigma^2+3)} + \dots\right) \left(1 + \frac{1}{4\sigma^2} + \dots\right)\right\} \rightarrow 0 \text{ as } \sigma \rightarrow \infty. \end{aligned}$$

から示されている. 故に, 定理 3.1 から  $\lambda$  のルヤフ測度に関してこの臨んど許容性が示された.

最後に, 定理 3.2 から示されることをみる. (28), (29) は自明である. (30), (33), (34) は比較的簡単に示されたことになるが, (31), (32) は大変である. しかし示されたことはわかる. ここではその check は除く.

$$(36) \text{ は, } r^{(\sigma)}(\omega) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left[-\frac{\omega^2}{2\sigma^2}\right].$$

$$\frac{d}{d\omega} r^{(\sigma)}(\omega) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \left(-\frac{\omega}{\sigma^2}\right) \exp\left[-\frac{\omega^2}{2\sigma^2}\right].$$

$$\hat{\omega}(x) = x, \quad g(\omega) = 1.$$

$$\begin{aligned} \text{従って, } \lim_{\sigma \rightarrow \infty} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{r^{(\sigma)}(\omega)} \left[\frac{d}{d\omega} r^{(\sigma)}(\omega)\right]^2 d\omega &= \lim_{\sigma \rightarrow \infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma^4} \int_{-\infty}^{\infty} \omega^2 \exp\left[-\frac{\omega^2}{2\sigma^2}\right] d\omega \\ &= \lim_{\sigma \rightarrow \infty} \frac{\sigma^2}{\sigma^3} = 0. \text{ から示されたことになる.} \end{aligned}$$

序論で述べた難点(1)は [1] では  $M^{(0)}(\alpha)$  が有界関数という仮定が少しきつ  
いことである。今述べた例では  $M^{(0)}(\alpha)$  が  $\alpha$  の二次式であって有界関数になり  
だからそれを止めて (16) に変えた。

### 参考文献

[0] 工藤弘吉：統計的決定関数の良さについて

これはこの研究会で発表された原稿である。

[1] Stein, C.: Approximation of improper prior measures by  
prior probability measures, Bernoulli, Bayes, Laplace.  
(Proc. Inter. Res. Sem.) 1965, Springer, Berlin.

[2] Stein, C.: A necessary and sufficient condition for  
admissibility, Ann. Math. Stat. 26 (1955) pp. 518-522.

[3] 竹内 啓：統計的推定論(II), 数学16 (1965) pp. 11-21

[4] Matusita, K.: On the theory of statistical decision  
functions, Ann. Inst. Stat. Math. (1952) pp. 17-35

任佳